

◎新型コロナウイルス禍で考える日本の行方

◎第 21 回 夏を前に想う「靖國の心」

全国日本語学校連合会 研究員 對馬好一

毎日、ロシアによるウクライナ侵攻のニュースが洪水のように送られてきています。開戦した2月24日は、現地で雪が舞っていましたが、100日以上を経過した最近<sup>しやくねつ</sup>は、灼熱の太陽が照り付ける戦場<sup>くうぼく</sup>、空爆や市街戦で破壊され、瓦礫<sup>がれき</sup>と化したビル群<sup>ようしや</sup>に容赦なく降り注ぐ強い陽射<sup>ひざ</sup>しの映像が多く伝えられるようになってきました。

こうした光景を見ると、私たち日本人の脳裏<sup>のうり</sup>には、77年前の昭和20<sup>しやうわ</sup>（1945）年8月6日の月曜日の朝、原子爆弾<sup>げんしぱくだん</sup>が落とされた広島市、3日後の木曜日の9日昼に同じように原子爆弾に襲われた長崎市の情景が浮かび上がってきます。そして、次の週の水曜日だった15日正午、全国にラジオで流れた昭和天皇（現在の天皇陛下の祖父）による終戦の玉音<sup>ぎよくおん</sup>放送を聴き、泣きむせびながら地面にひれ伏す国民（「<sup>しんみん</sup>臣民」と呼ばれていた）の姿が思い出されま<sup>す</sup>。「玉音」は「天皇の音声」という意味です。一般の日本国民はこの時、初めて天皇の声を聞きました。

「思い出す」と言っても、現在の国民は戦後生まれがほとんどです。生まれる前に起きたことで、少なくとも私には実体験がないのですが、私たち日本人にとっては世代を超えて語り継がなければならない、民族にとっての悲劇でした。だからこそ、毎年夏になるとマスコミが競ってこうした番組、記事を流し、国民の目や耳に触れ続けています。そして今年<sup>は</sup>ウクライナ戦争の影響で、本格的な夏を待たずにこうした議論が多く見受けられています。

日本全国各地には、国家のために命を失った英霊<sup>えいれい</sup>を祀る護国神社<sup>まつごこくじんじや</sup>があり、東京・九段には、靖國神社<sup>やすくにじんじや</sup>が祀られているのはご承知の通りです。

毎年8月15日の終戦の日になると靖國神社をめぐり、「首相が真榊<sup>まさかさき</sup>と呼ばれる供え物を奉納した」「〇〇大臣が参拝した」と喧<sup>かまびす</sup>しい報道合戦が繰り広げられます。しかし、実際に祀られている方々にとってはこうした報道<sup>ありがためいわく</sup>は有難迷惑な喧騒<sup>けんそう</sup>に過ぎないのではないでしょう

か。

靖國神社は、江戸時代までの侍<sup>さむらい</sup>主導の社会が近代日本に生まれ変わるさなかの明治<sup>めいじ</sup>2 (1869) 年、明治天皇 (昭和天皇の祖父) の命<sup>めい</sup>によって建てられた「招魂社<sup>しょうこんしゃ</sup>」が始まりです。明治7 (1874) 年に初めて御親拝<sup>ごしんぱい</sup>になった (天皇が参拝<sup>さんぱい</sup>された) 際に読まれた (和歌を作ることを「読む」と言います) 「我國の<sup>わがくに</sup> 為<sup>ため</sup>をつくせる人々の 名もむさし野にとむる玉かき」との御製<sup>ぎよせい</sup> (天皇が読まれた和歌) からわかるように、国のために命を捧げた英霊を慰め、その功績を後世に伝えることを目的にしています。

「我國の為を尽くせる人々」は、「日本のために尊い命を捧げた人々」を指しています。

「むさし野にとむる玉かき」は「武蔵野<sup>むさしの</sup>、つまり東京にその魂を留<sup>とど</sup>め、そこを石垣でしっかりと守る」とのお心が込められているといわれています。自分たちの後に続く国家国民のために命を投げ出した方々をお祀りし、感謝をささげようと、時の天皇がお考えになり、それを国民が営々と守ってきたのです。靖國神社<sup>せいこくじんしゃ</sup>は創建から今年で153年を迎えます。

この神社には、元号が明治になる直前の慶応<sup>けいおう</sup>4 (1868) 年に起きた、旧徳川幕府軍と明治新政府軍の間で戦われた戊辰戦争<sup>ぼしん</sup>以降、これまでに戦死した人たちを祀<sup>まつ</sup>っています。外国で言えば、米国・バージニア州にあるアーリントン国立墓地、中国・北京の人民英雄紀念碑などに相当する、戦争で亡くなった方に一般国民が感謝を捧げ、平和を祈る施設です。靖國神社のホームページによれば、「靖國」という名は「国を靖<sup>やす</sup> (安) んずる」という意味で、「祖国を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いが込められているといえます。

ところで、夏には重要な国民的行事であるお盆が毎年訪れます。お盆は、日本に伝わる、祖先の霊を迎え、慰める風習です。8月15日の終戦の日は、旧暦<sup>たいいんれき</sup> (太陰暦) で言うと、その時期と重なることから、日本国民はそれぞれの家の歴史にのっとり、祖先を懐かしむ風習を続けています。それだけに、この頃になると、靖國神社に国民の目が向けられるようになるのでしょう。

終戦の日に靖國神社を訪れると、こうした思いの人たちが多く参拝しています。しかし、神社の神官<sup>しんかん</sup> (神様に仕える職員) に聞くと、「今日 (8月15日) には特別なお祀りは致しま

せん」と言います。「昭和 20（1945）年 8 月 15 日に終戦を迎えた先の大戦は、様々な戦争の 1 つであり、それだけのためにお祀りするわけではない。神社ができて以来 153 年間に国の為、そして国民・家族の為、命を捧げた全英霊を祀る」との考え方にのっとっているのでしょう。

靖國神社にとっては、春と秋に執行される例大祭<sup>れいたいさい</sup>が最も重要な行事であり、その他では、新暦<sup>たいようれき</sup>（太陽暦）のお盆である毎年 7 月 13～16 日に行われるみたままつりを賑やかに催しています。東京都内では、お盆の行事を新暦で行う家庭が多いことから、靖國神社もそれに合わせているのでしょう。

私はここ十数年、そのみたままつりの間に、境内にある能楽堂<sup>ほうのう</sup>で唱歌を奉納してきました。4 日間のまつり期間中、様々な人たちによる芸能がこの舞台上で演じられ、私たちはその中の 1 つとして、明治から昭和に至る軍歌や軍国歌謡、戦中戦後の世相を反映した流行歌を数人で威儀を正して歌い、奉納します。毎年選曲は替わりますが、最初に歌うのは「靖國神社の歌」です。途中には必ず、万葉集から歌詞をとり「第二の国歌」とも言われた国民歌謡「海行かば<sup>うみゆ</sup>」を入れ、最後に先の大戦前の昭和 11（1936）年の東京の街を歌った「東京ラブソディ」を聴衆の皆さんと一緒に合唱するまで、約 1 時間の舞台です。

会場は野外に観客席を設けているにもかかわらず、毎回、多くの人たちが私たちの歌を聴きに来てくださいます。戦争に行かれたくらいのご高齢の方もいらっしゃる一方、浴衣を着た若いカップルも立ち止まってくれます。毎回 200 枚用意してお配りする、その日の奉納曲の歌詞すべてを収めた歌詞カードがなくなるほどです。明治 38（1905）年、日露戦争でロシアに勝った日本陸軍の乃木希典<sup>のぎまねすけ</sup>大將が、停戦協議のために中国・旅順<sup>りょじゅん</sup>の水師營<sup>すいしやうい</sup>で、敗軍の將であるステッセル將軍と会見した際、驚くもてなした様子が歌詞に込められた文部省唱歌「水師營の会見」を歌うと、じっくりと聞き入ってくださいます。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、一昨年、昨年のみたままつりでは一連の芸能奉納が見送られました。静かに御霊安かれと祈るみたままつりもいいのですが、こうした御霊を讃え、慰める芸能が鑑賞できないことは、東京の空にお迎えした御霊や、今は亡き祖先を偲ぶ参拝者にとっては寂しかったことと思います。今年奉納ができれば、みたままつりでは 3 年ぶりとなります。私たちは最終日の 7 月 16 日土曜日の午後 7 時から奉納演奏する予定です。

国家の存立が侵されそうになる時に命を捧げて国土と国民・家族の生命財産を守ることに精励<sup>せんじん</sup>した先人たちの御霊が穏やかでいることを祈り、戦争がない平和な世界を求めること

は、万国共通の願いです。日露戦争を戦った日本とロシア双方の当時の将軍や兵隊たちもそう思っていたことでしょう。そうした思いで、ウクライナ戦争の行方をしっかりと見据え、ポスト新型コロナウイルス禍の社会を<sup>たくま</sup>逞しく築いていかなければなりません。